

「給」の素描

張 勤

1 はじめに

この小論は統語構造だけでなく、意味構造をも一つの切り口として「給」の全用法及びその周辺を整理して、統一的な説明を与える試みをするためのものであり、更に「給」の「受益」、「受損」の意味、ニュアンスを語用論的な立場から分析を加え、説明してみることにする。

1・1 一般的に「給」の基本的な統語構造は表層的に以下の五つあると整理される。

- (1) ① S + 給 (= V) + I O + D O
 ② S + V + 給 + I O + D O
 ③ S + 給 + I O + V + D O
 ④ S + V + D O + 給 + I O
 ⑤ S + 給 + I O + V (または V P)

しかし、このような統語構造の整理は、「給」の抱えている多くの問題を説明することができない。たとえば③の形式によってできた次の文はなぜ両義的なのかということ、

- (2) 李四給王五開門。
 a 李四が王五に門を開けてやる。

b—李四が王五に替わって（だれかに）門を開けてやる。

またなぜ（3）の「給」が意味的に「人間的終点目標」、「目的者」であるのに対して、（4）の「給」が「動作主」であるのかということなどは単なる構造の上では説明することができない。

（3） 張三給趙六算卦了。

—張三が趙六に占いをしてやった。

（4） 張三給趙六算計了。

—張三が趙六に騙された。

1・2 「給」をはじめとするいくつかの動詞、たとえば「租」「借」「賣」などは、直接的な作用の対象、作用の起点と到達点を意味上に必要とするものである。中国語の伝統的な文法ではそれらを「雙賓語」（二つの目的語）を必要とするものとして処理されているが、このような構造上だけの処理の仕方は同じ構造の（3）と（4）が異なる意味をなしていることを説明することができないし、また「給」の意味作用ははるかに普通で言う間接目的語と直接目的語の範囲を越えている。統語構造の概念である「間接的目的語」だけでは「給」を完全に論じ得ない。

1・3 日本語の授受表現、またはそれに伴う待遇表現的な意味を中国語との対照で考えるときによく引き合いに出されるのは「給」である。

しかし以下の例からも分かるように、「給」はもちろん受益の意味を帯びる場合（5）があるが、もっと多くの（6）のような場合は単なる授受の方向、つまり「給」の本来持つ意味を表すだけである。そして場合によっては受益の反対の意味、損害を受けるという「受損」の意味さえありうるわけで、たとえば（7）のようである。

（5） 王五給張三獎一支筆。

—王五は張三にペンを一本奨励した。

（6） 趙六給李四打一個電話。

—趙六が李四に電話を一本かけた。

(7) 老師給我打了一個鴨蛋。

—先生は私に零点をつけてくれた。

このことを統一的に説明するためにやはり単なる構造からだけではなく、もっと別の新しい角度が要請されるわけである。

2 「給」の意味構造

柴谷 78 において「太郎が花子に本をやった」と「花子が太郎に本をもらった」の両文が表面的な統語パターンのみを中心に分析するのでは、同じような構造として判断せざるをえなくて、前者の「花子に」が「花子から」と置き換えられないのに対して後者の「太郎に」が「太郎から」に置き換えられるという文法事実を説明することができないということが指摘されているが、同じことは前節で見たとおり、中国語の「給」においても起っているのである。そして柴谷 78 の指摘の通り、統語構造のみに光をあてるのではなく、意味構造の分析を一つの切り口として意味と統語構造の関係をはっきりさせなければならない。

2・1 「給」には以下の三つの異なる意味構造を持っている。

- (8) ① 人間的終点目標
 ② 目的者
 ③ 動作主

各意味構造においてはそれぞれの文法的な特徴が観察されるわけである。

2・2 人間的終点目標

2・2・1 「目標」は統語構造においては介詞（前置詞）「向 / 和 / 跟 /

「對 / 同 / 給 + 名詞」の形式で現れるか、「動詞 + 給 / 向」の形式で表現されるかであるが、どういう場合に「給」を用いるかに関しては以下の規則が存するものと考えられる。

(9) 目標「給」規則

目標となるものが人間であり、しかも物の移動の終点でもある場合には、そのような目標を「動詞 + 給」か「給 + 名詞」で表現せよ。

(9)の規則を言い換えると、「給」で目標が表される時は、その目標が人間で、その人間まであるものが移動していくといった意味が持たれるということである。これは「給」が単なる人間の目標を表す「和 / 跟 / 對 / 同」と違うし、また物的な目標と人間的な目標のどれでもよい「向」とも異なるということの意味する。(9)を適用する例は以下のようなものが考えられる。

- (10) 我寄給他一本書。
—私は彼に本を一冊送る。
- (11) 老王遞給小霞二包中藥。
—王さんは小霞に二包みの漢方薬を渡す。
- (12) 我推薦給他一名英語教師。
—私は彼に英語の教師を一名推薦する。
- (13) 王老五送兩斤肉給王老六。
—王老五は王老六に肉を一キロ贈る。

(10) ~ (13)の「他」「小霞」「他」「王老六」は「寄」「遞」「推薦」「送」のめざしている人間のターゲットであると同時に「書」「中藥」「英語教師」「肉」の最終的な到達点でもある。(12)の「英語教師」が移動しているということについてはもう少し抽象的な理解が必要であろう。つまり「推薦」によって「他」と「英語教師」とが関連づけられたと考えるべきであり、この意味で「我」の知合いであった「英語教師」が「他」の所まで行った

というわけである。(14) (15) も (12) と同じことが考えられよう。

- (14) 我給他使一個眼色。
—私は彼にウィンクを与えた。
- (15) 小紅給爸爸作了一個鬼臉。
—小紅は父にあかんべいをした。

2・2・2 「人間的終点目標」の「給」の統語形式は以下の三つである。

- (16) ① S + 給 + I O + D O
② S + V + 給 + I O + D O
③ S + 給 + I O + V + D O

この三つの形式の中では①は「給」が本動詞として用いられている形式である。あとで触れるように「給」はもともとこの本動詞の「給」から出ているものである。本動詞の「給」も間接目的語を「給」によって導入するわけであるが、ただしこの場合は「給+給」という同音同義⁽¹⁾のものが並ぶことになるので、後者が消去されてしまうと考えられる。そう解釈すれば、①の形式を立てる必要がなくなるが、ここでは一応言語事実に即して並べておくことにする。

②の「給」が動詞の補語であり、「給」によって導入される間接目的語はいわばV動詞の意味素性から要請されるものであるのに対して、③の「給」は前置詞句の構造を取っており、それによる間接目的語は動詞の意味素性から要求されるものではなく、一つの事態を過不足に表現するために取り付けられるものである⁽²⁾。以下②と③における「給」によって導入される「人間的終点目標」をそれぞれ「補語的人間的終点目標」と「前置詞句的人間的終点目標」と呼ぶことにしよう。

「人間的終点目標」のこの二種の異なる立ち現れ方によって、具体的な動詞においては、使用に制限が現れてくる。一般的に「人間的終点目標」的な間接目的語をその意味素性からつよく要求する動詞は、補語的終点目標が取れるが、「前置詞句的人間的終点目標」は取れない。こういう動詞はも

ちろん形式の上では「給+名詞」の前置詞句を取ることがありうるが、意味は「目的者」となり、別のものとなる。このような動詞を「補語的人間的終点目標動詞」と呼ぼう。

一方「補語的人間的終点目標」も「前置詞句的人間的終点目標」も同様の意味で取ることができる動詞がある。この場合、動詞は、意味素性から必ずしも「人間的終点目標」的な間接目的語を要求していない。「人間的終点目標形式自由な動詞」と呼ぼう。

「補語的人間的終点目標動詞」は典型的には「借」(借りる), 「租」(レンタルする), 「賣」(売る) などがある。

(17) 我借給你一輛自行車吧。

*我給你借一輛自行車吧。(「人間的終点目標」の意味では使えない。)

—自転車を君に一台貸そう。

(18) 別人租給她一套房子。

*別人給她租一套房子。(「人間的終点目標」の意味では使えない。)

—人が彼女に建物をレンタルした。

(19) 我賣給他兩斤肉。

*我給他賣兩斤肉。(「人間的終点目標」の意味では使えない。)

—わたしは彼に肉を一キロ売った。

「人間的終点目標形式自由な動詞」はたとえば「打」((電話を)かける), 「送」(贈る), 「分」(配る) である。

(20) 我打給老師一個電話。

我給老師打一個電話。

—わたしは先生に電話をかけた。

(21) 王五送給李四一塊糖。

王五給李四送一塊糖。

—王五は李四に飴を一つ贈った。

- (22) 學校分給了王主任兩間房子。
 學校給王主任分了兩間房子。
 一大学は王主任に部屋を二つ配った。

以下は「補語的人間的終点目標動詞」と「人間的終点目標形式自由な動詞」の用例をもう少し挙げておく。

「補語的人間的終点目標動詞」

- (23) 她還給圖書館幾本書。
 一彼女は図書館に本を何冊かを返した。
- (24) 她借給他一把椅子。
 一彼女は彼に椅子を一つ貸した。
- (25) 大娘賣給他們一箱冰棍。
 一おばあさんはかれらに一箱のアイスクャンディーを売った。
- (26) 本月會費我交給組長了。
 一今月の会費は、わたしは組長におさめた。
- (27) 王五嫁給他一個閨女。
 一王五是娘を一人彼にやった。
- (28) 師匠傳給我一門技術。
 一師匠はわたしに一つの技術を伝えてくれた。

「人間的終点目標形式自由な動詞」

- (28) 她遞給客人一支煙。
 她給客人遞一支煙。
 一彼女はお客にタバコを一本渡した。
- (29) 他們分給我兩間房子。
 他們給我分兩間房子。
 一彼らは私に部屋を二間配ってくれた。
- (30) 她找給顧客五塊錢。
 她給顧客找五塊錢。

- 彼女はお客におつりを五元返した。
- (31) 她退給飯館兩個瓶子。
她給飯館退兩個瓶子。
—彼女はレストランに空きビンを二つ返した。
- (32) 她付給他一筆款子。
她給他付一筆款子。
—彼女は彼に一口の金を支払った。
- (33) 她賞給他一塊手表。
她給他賞一塊手表。
—彼女は彼に腕時計を一本賞した。
- (34) 她賠給商店一塊玻璃。
她給商店賠一塊玻璃。
—彼女は店にガラスを一枚賠償した。
- (35) 她發給我一條毛巾。
她給我發一條毛巾。
—彼女はわたしにタオルを一枚配ってくれた。
- (36) 她補給我兩毛錢。
她給我補兩毛錢。
—彼女はわたしに（足りない分として）二角を足してく
れた。
- (37) 他們撥給我們十幾個人。
他們給我們撥十幾個人。
—彼らはわたしたちに十何人まわしてくれた。
- (38) 上級批給公司十噸鋼材。
上級給公司批十噸鋼材。
—上のほうは会社に鉄鋼を十トン許可した。
- (39) 老師獎給他一本辭典。
老師給他獎一本辭典。
—先生はかれに辞書を一冊賞した。
- (40) 我們補助給他五十元。
我們給他補助五十元。

—われわれはかれに五十元を補助した。

(41) 誰獎勵給他們一臺彩電？

誰給他們獎勵一臺彩電？

—だれがかれらにカラーテレビを一台獎勵したか。

(42) 領導分配給我們兩個大學生。

領導給我們分配兩個大學生。

—リーダーはわたしたちに大学生を二人くれた。

(43) 我們補充給他們一車石油吧。

我們給他們補充一車石油吧。

—われわれはかれらに運油車一台分の石油を補足しよう。

2・2・3 「給」によって導入されるような「人間的終点目標」は統語形式上「給」が無形のままでも現れる。これは二つのケースに分けて考えることにしよう。

2・2・3・1 まずこれまで見てきた有形の「人間的終点目標」の「給」を取る動詞であるが、「補語的人間的終点目標」の「給」の無形はかなり自由で、一般的である⁽³⁾が、「前置詞句的人間的終点目標」は「給」が無形になるのには、主語より前置されなければならない、文頭に取り立てられる構造でなければならない。それに応じて、意味的にも「題目」「対比」のニュアンスが出てくる。後者の場合の用例を見てみよう。

(44) 他，我教了一個法子。

—彼には，わたしは一つの方法を教えておいた。

(45) 難民，我們補助了一些糧食。

—難民には，わたしたちはちょっと食糧を補助した。

更に「補語的人間的終点目標」も文頭に取り立てることができる。この場合も「給」が無形となる。こういう「給」構造の文の取り立てについては、3・5・1で見ることにするが、以下一例だけあげておく。

她, 我賣了一包煙。

- (46) 一彼女には, わたしは煙草を一箱売った。

2・2・3・2 中国語は統語構造において, 最初から「人間的終点目標」の「給」が無形であることを要求する動詞がある。実はこういう動詞は構造的に間接目的語と直接目的語を要求するものではなく, 直接目的語を要求するだけのものである。また意味的にも「誰かに何かを渡す, またはしてあげる」というような意味はなく, 単に直接対象物に作用を加える意味だけである。

- (47) 她規定我兩個條件。

一彼女は私に対し条件を二つ決めた。

- (48) 她喂寶寶奶。

一彼女は赤ちゃんにお乳を与える。

- (49) 他們灌了王五幾杯酒。

一かれらは王五にお酒を何杯か飲ませた。

(47) (48) (49) の用例は, 「人間的終点目標」を要求する他の動詞の文と違い, (50) のように, 他の動詞文の「直接目的語」に当たる成分を省略することができる。しかし, (51) はそれができない。

- (50) 我來喂他吧。

一私がこの子に(ミルク)を与えようか。

- (51) *我打給他。

(我打給他電話)

一わたしはかれに(電話を)かける。

(47) ~ (49) における「兩個條件」「奶」「幾杯酒」は補足的に動詞の意味を明確にするだけの役割を果たしている。「規定」「喂」「灌」の意味構造にすでに意味素性として「規定条件(条件を決める)」「喂奶(ミルクをあたえる)」「灌酒(酒を飲ませる)」の意味が存在しているのである。

(47)～(49)のような動詞文は「前置詞句」の形式の「給」を持つことができる。

2・3 目的者

「目的者」とはある動作や作用の向かわれる者であり、最終的にその動作や作用を受ける者である。動作や作用の向かい方はいろいろ異なるが、いずれも「目的者」という情報は動詞の意味素性が持つところのものではなく、表現の際に事柄を不足のないように表すために補足的に取り付けられるものである。統語構造においては「給＋名詞＋V」という前置詞句の形式を取る。

- (52) 我給她看孩子。
—わたしは彼女のかわりに子供を見守る。
- (53) 我給爺爺打傘。
—私はおじいさんのために傘をさす。
- (54) 我一定給大娘爭氣。
—わたしは必ず意地にもおばあさんのために頑張り抜く。
- (55) 他給我找麻煩。
—彼はお手数をかけてくれた。
- (56) 我給你捧場。
—ぼくはきみのちょうちんを持つ。
- (57) 醫生給病人打針。
—医者には患者に注射をする。

動作や作用の向かい方によって、「目的者」は(52)のように本来なら自分がすべきことを他人が替わってくれたような者を意味することも可能であるし、(53)～(57)のようにだれの為にある動作をするのか、その動作の向かわれる者を表すこともできる。

「給」による「人間的終点目標」と「給」による「目的者」の意味構造における根本的な違いは、「人間的終点目標」が物質の移動の終点でもあるのに対して、「目的者」はある動作、行為、作用の向かわれる対象である。こ

の違いは構文上においても大きな差が出てくる。たとえば、「目的者」の場合は、「人間的終点目標」ができる以下の形式は取れない。

- (58) * 醫生打給病人針。
 一 医者は患者に注射をする。
- (59) * 醫生打針給病人。
 一 医者は患者に注射をする。
- CF. (60) 醫生給病人打電話。
 一 医者は患者に電話する。
- (61) 醫生打給病人電話。
 一 医者は患者に電話する。
- (62) 醫生打電話給病人。
 一 医者は患者に電話する。

(58) (59) の「打針 (注射する) の「打」は中国語においてはもし間接目的語をつけるなら、「目的者」としてのものを要求する。すなわち「醫生給病人打針」のように言わなければならない。それに対して「打電話 (電話をかける) の「打」は「人間的終点目標」としての間接目的語を必要する。

「給」の「人間的終点目標」と「目的者」の統語構造上の異同について、3節で見ることにする。

2・4 動作主

2・4・1 「給」によって導入される動作主は、補文の主語となる一方、主文にとっては補足的な要素でもあり、「目的者」の意味をもつものである。「給」で導入される「動作主」が「目的者」と「動作主」の両方の役割を兼ねているから、そういう類の構造が「兼語」と呼ばれるわけである。

- (63) 殺鷄給猴看。
 一 鷄を殺して猿に見せる (見せしめをする)。
- (64) 請你把那雙靴子給我試試。

—あのブーツをわたしに試着させてください。

(65) 你不聽話就不給你去看電影。

—話を聞いてくれなければ、映画を見に行かせない。

(66) 大娘作件衣服給你穿。

—おばあさんが服を作って君に着せよう。

2・4・2 「給」による「動作主」の主文の主語との関係は二つある。

(67) ① 主文主語：「動作主」
 || ||
 使役者 使役対象

② 主文主語：「動作主」
 || ||
 受動主体 動作主

即ち、「給」による「動作主」の構造は使役文と受け身文の二つを構成する、ということである。

(68) 我給他拿走了些書。

—(使役文) 私は彼に若干の本を持って行かせた。

(受け身文) 私は彼に若干の本を持って行かれた。

(69) 我的座位給她坐了。

—(使役文) 私は席を彼女に譲った。

(受け身文) 私は席を彼女に取られた。

使役か受け身かを確定させるためには、語用論的な条件と幾つかの動詞の意味論的な条件に依らなければならないが、それについては、5節で考えることにしよう。

2・4・3 使役の「動作主」の構造を見よう。

(70) 使役文

- ① S + 給 + I O + C V P
- ② S + 給 + I O + D O + C V
- ③ S + V + 給 + I O + D O + C V
- ④ S + V + D O + 給 + I O + C V
- ⑤ S + 給 + I O + V + D O + C V

使役の形式は「人間的終点目標」と「目的者」の「給」の構造の延長上にあると言える。このことが次の用例で明らかになる。

(71) a (人間的終点目標, 補語的目標動詞)

我借給你一本書。

—ぼくは君に本を貸そう。

b (使役)

1 我借給你一本書看。

—ぼくは君に本を貸して読ませよう。

2 我借一本書給你看。

—ぼくは君に本を貸して読ませよう。

(72) a (人間的終点目標, 目標形式自由な動詞)

先給他們補助一些錢。

—まず彼らにいくらかのお金を補助しよう。

b (使役)

1 先補助給他們一些錢用。

—まず彼らにいくらかのお金を補助して使ってもらおう。

2 先給他們補助一些錢用。

—まず彼らにいくらかのお金を補助して使ってもらおう。

3 先補助一些錢給他們用。

—まず彼らにいくらかのお金を補助して使ってもらおう。

(73) a (目的者)

大娘給我熬醬。

—おばあさんはわたしにおかゆを作ってくれる。

b（使役）

大娘給我熬醬喝。

—おばあさんはわたしにおかゆを作って食べさせてくれる。

「給」の使役文は、構文的に直接目的語が補文に入り、「給」によって導入されるものが主文の動詞の対象であると同時に補文の主語にもなること以外は、「人間的終点目標」と「目的者」の場合と基本的に同じ形式をとる⁽⁴⁾。

2・4・4 次は受け身の場合を観察する。形式は（74）だけである。

（74） 受け身文

S + 給 + I O + V P

（75） 我給他騙了。

—わたしはかれに騙された。

（76） 他給我騙了。

—かれはわたしに騙された。

（77） 飯都給他喫了。

—ご飯はみんな彼に食べられてしまった。

（78） 我的車給他修好了。

—わたしの車は彼によって直された。

（79） 三年來不知道給她穿壞了多少衣服。

—三年来どれくらいの服を彼女に着て破られたか知らない。

受け身文は基本的に一般の受け身文と同じ構造をなす。他の受け身形式、たとえば「被」「讓」「叫」などとの違いは、どちらかという、意味的よりも文体的なものである。「給」の受け身文は、話し言葉的である。

3 「給」の統語構造

2節においては、「給」の意味構造に従って、「給+名詞」の構造は「人間的終点目標」「目的者」「動作主」の三種の役割があること、そして最小限にその三種の意味的な役割に対応する構造を見た。この節では、「給」による文の構造をまとめて整理し、さらに三種の役割に対応する統語的な文法上の特徴を見渡してみることにする。

3・1 まずこれまで見てきた「人間的終点目標」「目的者」「動作主」のそれぞれの統語構造を図表にしてまとめておく。そしてこれからの説明がしやすいように、異なる形式には通し番号をつけておく。

(80)

役割	基本的な統語構造
人間的終点目標	補語的目標動詞 ① S + 給 + IO + DO ② S + V + 給 + IO + DO ③ S + V + DO + 給 + IO 補語形式自由な動詞 ② S + V + 給 + IO + DO ③ S + V + DO + 給 + IO ④ S + 給 + IO + V + DO
目的者	⑤ S + 給 + IO + VP
動作主	使役 ⑤ S + 給 + IO + CVP ⑥ S + 給 + IO + DO + CV ⑦ S + V + 給 + IO + DO + CV ⑧ S + V + DO + 給 + IO + CV ⑨ S + 給 + IO + V + DO + CV 受け身 ⑤ S + 給 + IO + VP

3・2 (80) の図表にあるように、③の形式は「人間的終点目標」の場合にしか用いられない。③の「給」は次の例のようにテンス「了」「過」、否定「不」「没（有）」などが付けられるので、①の「給」とまったく同じ性質の物で、動詞たるものである。

- (81) S + V + DO + 給 + IO
我 買 書 給 他。
—私は本を買って彼にあげる。
- (82) 我買書給了他。
—私は本を買って彼にあげた。
- (83) 我以前買書給過他。
—私は以前本を買って彼にあげたことがある。
- (84) 我買了書也不給他。
—私は本を買っても彼にあげない。
- (85) 我買了書没給他。
—私は本を買ったが、彼にあげなかった。

③は次のような分析が可能である。

- (86) [S [[S1 [NP 我] [VP [V 買] [N 書]]] [S2 [NP 我] [VP [V 給] [NP 他]]]]]

つまり並立文である。表記的には「我買書，給他。」でも可能である。

「人間的終点目標」の場合だけ、③の構文形式が許されるということは、「人間的終点目標」の「給」が他の「給」と違って、人間的なターゲットを要求し、それを移動の終点とする、という意味構造を持っていることを物語っている。これは「給」の本動詞として持つ意味構造でもある。③の形式は我々が2節で出した(9)の規則が正しいということを説明し、「人間的終点目標」が他の二つの意味役割から区別されているのである。

3・3 「人間的終点目標」と「目的者」は同一の文に現れることが可能で

ある⁽⁵⁾。

- (87) 我給爸爸打一個電話給妹妹。
—私は父のために妹に電話を一本かけた。
- (88) 弟弟給我寄給她一件衣服。
—弟は私に替わって彼女に一枚の服を送った。

以上の二例から言えることは、「人間的終点目標」と「目的者」は意味的に異なるということである。更に「人間的終点目標」と「動作主」も一緒に使えてよいわけである。

- (89) (受け身) 我的書給他賣給舊書店了。
—私の本は彼に古本屋に売った。
- (90) (使役) 我只給你打給他一個電話。
—あなたに彼への電話を一本だけさせよう。

3・4 「目的者」と「動作主」は、「給」がそれぞれ意味的に近い「爲」「替」「讓」「叫」「被」と置き換えることができる。

- (91) a 我給爺爺打傘。
—私はおじいさんに傘をさす。
- b 我替爺爺打傘。
—私はおじいさんに傘をさす。
- c 我爲爺爺打傘。
—私はおじいさんに傘をさす。
- (92) a 她給爺爺作衣服。
—彼女はおじいさんに服を作る。
- b 她替爺爺作衣服。
—彼女はおじいさんに服を作る。
- c 她爲爺爺作衣服。
—彼女はおじいさんに服を作る。

「爲」「替」は「人間的終点目標」では置き換えられない。たとえば、「わたしは君に電話をかける」という意味では、次の(93)のd, eは非文となる。

- (93) a 我給你打電話。
 b 我打給你電話。
 c 我打電話給你。
 d *我替你打電話。
 e *我為你打電話。

「替」「爲」で置き換えられるかどうかは「人間的終点目標」と「目的者」を区別する大きなポイントとなる。

「動作主」の「給」は、使役の時には「讓」「叫」で置き換えられるが、受け身の時には「被」「讓」「叫」で置き換えられる。

次はまず使役の例である。

- (94) a 他要去，我們就給他去。
 —彼が行きたいのなら，行かせよう。
 b 他要去，我們就讓他去。
 —彼が行きたいのなら，行かせよう。
 c 他要去，我們就叫他去。
 —彼が行きたいのなら，行かせよう。

次は受け身の例を見よう。

- (95) a 車給他弄壞了。
 —車は彼に壊された。
 b 車被他弄壞了。
 —車は彼に壊された。
 c 車叫他弄壞了。
 —車は彼に壊された。

- d 車讓他弄壞了。
一車は彼に壊された。
- (96) a 寶寶給你鬧醒了。
一赤ちゃんは君に騒がれて目が覚めた。
- b 寶寶被你鬧醒了。
一赤ちゃんは君に騒がれて目が覚めた。
- c 寶寶叫你鬧醒了。
一赤ちゃんは君に騒がれて目が覚めた。
- d 寶寶讓你鬧醒了。
一赤ちゃんは君に騒がれて目が覚めた。

「給」の関係する受け身には (97) (98) のような形式も見られる。

- (97) 車？給 / 被 / 叫 / 讓他給弄壞了。
一車は彼に壊された。
- (98) 寶寶？給 / 被 / 叫 / 讓你給鬧醒了。
一赤ちゃんは君に騒がれて目が覚めた。

「讓」「叫」「被」などはもちろん「人間的終点目標」「目的者」においては現われて来ない。「讓」「叫」「被」は「動作主」を「給」の一つの役割として認めるポイントとなる。

3・5 これから見ると「給」の文の幾つかの特徴は必ずしも三つの役割を区別するポイントになるとは限らないが、「給」の構造の一般的な特徴として述べておく。

3・5・1 主題

3・5・1・1 まずすべての形式を通して直接目的語が全部主題になることができる。

人間的終点目標

- (99) a ①他給我書。
—彼はわたしに本をくれる。
- b 書, 他給我。
—一本は彼がわたしにくれる。
- (100) a ②他借給我書。
③他借書給我。
—彼はわたしに本を貸す。
- b 書, 他借給我。
—一本は彼がわたしに貸す。
- (101) a ②他買給我書。
③他買書給我。
—彼はわたしに本を買ってくれる。
- b 書, 他買給我。
—一本は彼がわたしに買ってくれる。
- (102) a ④他給我買書。
—彼はわたしに本を買ってくれる。
- b 書, 他給我買。
—一本は彼がわたしに買ってくれる。

目的者

- (103) a ⑤他給我買書。
—彼はわたしのために本を買う。
- b 書, 他給我買。
—一本は彼がわたしのために買う。

動作主（使役）

- (104) a ⑤他給我買書。
—彼はわたしに本を買わせる。
- b 書, 他給我買。
—一本は, 彼はわたしに買わせる。
- (105) a ⑥他給我冰棍喫。
—彼はわたしにアイスクャンディーを食べさせてくれ

る。

b 氷棍, 他給我喫。

—アイスクャンディーは, 彼はわたしに食べさせてくれる。

(106) a ⑦他買給我氷棍喫。

⑧他買氷棍給我喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b 氷棍, 他買給我喫。

—アイスクャンディーは, 彼はわたしに買って食べさせてくれる

(107) a ⑨他給我買氷棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b * 氷棍, 他給我買喫。

動作主 (受け身)

(108) a ⑤我給他弄壞了收音機。

—わたしは彼にラジオを壊された。

b 收音機, (我) 給他弄壞了。

(我) 收音機給他弄壞了。

—ラジオは (わたしは) 彼に壊された。

(107) b ができないのは「買」と「喫」が同じ位置に来てしまったからである。

3・5・1・2 間接目的語の場合, 「給」による部分が主題になると, 非常に不自然な文となることがある。「対比」の意味が出るから, 文が単独では成立しにくい。

人間的終点目標

(109) a ①他給我書。

—彼はわたしに本をくれる。

b ? 我, 他給書。

(110) a ②他借給我書。

b * 我, 他借給書。

c ? 我, 他借書。

(111) a ③他借書給我。

—彼はわたしに本を貸す。

b * 我, 他借書給。

c ? 我, 他借書。

(112) a ②他買給我書。

b * 我, 他買給書。

c ? 我, 他買書。

(113) a ③他買書給我。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b * 我, 他買書給。

c ? 我, 他買書。

(114) a ④他給我買書。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b 我, 他給買書。

—わたしには彼は本を買ってくれる。

c ? 我, 他買書。

目的者

(115) a ⑤他給我買書。

—彼はわたしのために本を買う。

b 我, 他給買書。

—わたし（のため）には彼は本を買ってくれる。

c ? 我, 他買書。

動作主（使役）

(116) a ⑤他給我買書。

—彼はわたしに本を買わせる。

b 我, 他給買書。

—わたしには、彼は本を買わせる。

c ? 我, 他買書。

(117) a ⑥他給我冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを食べさせてくれる。

b 我, 他給冰棍喫。

—わたしには彼はアイスクャンディーを食べさせてくれる。

c * 我, 他冰棍喫。

(118) a ⑦他買給我冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b * 我, 他買給冰棍喫。

c * 我, 他買冰棍喫。

(119) a ⑧他買冰棍給我喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b * 我, 他買冰棍給喫。

c * 我, 他買冰棍喫。

(120) a ⑨他給我買冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b 我, 他給買冰棍喫。

—わたしには彼はアイスクャンディーを買って食べさせてくれる

c * 我, 他買冰棍喫。

動作主 (受け身)

(121) a ⑤我給他弄壞了收音機。

—わたしは彼にラジオを壊された。

b * 他, 我給弄壞了收音機。

(「彼はラジオをわたしに壊された。」という意味になる)

c * 他，我給弄壞了收音機。

（「彼はラジオをわたしに壊された。」という意味になる）

「給」を残したまま，題目の位置に移動すれば，もっと座りが悪いようである。

人間的終点目標

(122) a ①他給我書。

—彼はわたしに本をくれる。

b * 給我，他書。

(123) a ②他借給我書。

b ? 給我，他借書。

(124) a ③他借書給我。

—彼はわたしに本を貸す。

b ? 給我，他借書。

(125) a ②他買給我書。

b ? 給我，他買書。

(126) a ③他買書給我。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b ? 給我，他買書。

(127) a ④他給我買書

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b ? 給我，他買書。

動作主（使役）

(128) a ⑤他給我買書。

—彼はわたしに本を買わせる。

b ? 給我，他買書。

(129) a ⑥他給我冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを食べさせてくれる。

b * 給我，他冰棍喫。

- (130) a ⑦他買給我氷棍喫。
—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる
b *給我, 他買氷棍喫。
- (131) a ⑧他買氷棍給我喫。
—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。
b *給我, 他買氷棍喫。
- (132) a ⑨他給我買氷棍喫。
—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。
b *給我, 他買氷棍喫。
—わたしには彼はアイスクャンディーを買って食べさせてくれる

動作主 (受け身)

- (133) a ⑤我給他弄壞了收音機。
—わたしは彼にラジオを壊された。
b *給他, 我弄壞了收音機。

3・5・2 省略

直接目的語は全部省略しても意味が尽くされていない以外は文が自然である。それに対して、間接目的語は「給」を含む部分が省略されることはできるが、もとの意味がなくなって他の意味に変わってしまう。

直接目的語の省略

人間的終点目標

- (134) a ①他給我書。
—彼はわたしに本をくれる。
b 他給我。
—彼はわたしにくれる。
- (135) a ②他借給我書。

③他借書給我

—彼はわたしに本を貸す。

b 他借給我。

—彼はわたしに貸す。

(136) a ②他買給我書。

③他買書給我。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b 他買給我。

—彼はわたしに買ってくれる。

(137) a ④他給我買書。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b 他給我買。

—彼はわたしに買ってくれる。

目的者

(138) a ⑤他給（替 / 爲）我買書。

—彼はわたしのために本を買う。

b 他給（替 / 爲）我買。

—彼はわたしのために買う。

動作主（使役）

(139) a ⑤他給（讓 / 叫）我買書。

—彼はわたしに本を買わせる。

b 他給（讓 / 叫）我買。

—彼はわたしに買わせる。

(140) a ⑥他給我冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを食べさせてくれる。

b 他給我喫。

—彼はわたしに食べさせてくれる。

(141) a ⑦他買給我冰棍喫。

⑧他買冰棍給我喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせ

てくれる。

b 他買給我喫。

—彼はわたしに買って食べさせてくれる。

(142) a ⑨他給我買冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b *他給我買喫。

動作主 (受け身)

(143) a ⑤我給他弄壞了收音機。

—わたしは彼にラジオを壊された。

b ? (我) 給他弄壞了。

— (わたしは) 彼に壊された。

間接目的語の省略

人間的終点目標

(144) a ②他借給我書。

③他借書給我。

—彼はわたしに本を貸す。

b 他借書。

—彼は本を借りる / 貸す。

(145) a ②他買給我書。

③他買書給我。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b 他買書。

—彼は本を買う。

(146) a ④他給我買書。

—彼はわたしに本を買ってくれる。

b 他買書。

—彼は本を買う。

目的者

(147) a ⑤他給 (替 / 爲) 我買書。

—彼はわたしのために本を買う。

b 他買書。

—彼は本を買う。

動作主（使役）

(148) a ⑤他給（讓／叫）我買書。

—彼はわたしに本を買わせる。

b 他買書。

—彼は本を買う。

(149) a ⑥他給我冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを食べさせてくれる。

b 他喫冰棍。

—彼はアイスクャンディーを食べる。

(150) a ⑦他買給我冰棍喫。

⑧他買冰棍給我喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b 他買冰棍喫。

—彼はアイスクャンディーを買って食べる。

(151) a ⑨他給我買冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b 他買冰棍喫。

—彼はアイスクャンディーを買って食べる。

動作主（受け身）

(152) a ⑤我給他弄壞了收音機。

—わたしは彼にラジオを壊された。

b 我弄壞了收音機。

—わたしはラジオを壊した。

しかし、間接目的語はいくつかの形式が、「給」を残して、他の部分を省

略することができる。この場合は次の例のように「人間的終点目標」「目的者」「動作主」の意味が残るのである。

人間的終点目標

- (153) a ②他借給我書。
 ③他借書給我。
 —彼はわたしに本を貸す。
 b *他借給書。
- (154) a ②他買給我書。
 ③他買書給我。
 —彼はわたしに本を買ってくれる。
 b *他買給書。
- (155) a ④他給我買書。
 —彼はわたしに本を買ってくれる。
 b 他給買書。
 —彼は本を買ってくれる。

目的者

- (156) a ⑤他給(替/爲)我買書。
 —彼はわたしのために本を買う。
 b 他給買書。
 —彼は誰かのために本を買う。

動作主(使役)

- (157) a ⑤他給(讓/叫)我買書。
 —彼はわたしに本を買わせる。
 b 他給(讓/叫)買書。
 —彼は本を買わせる。
- (158) a ⑥他給我冰棍喫。
 —彼はわたしにアイスクャンディーを食べさせてくれる。
 る。
 b 他給喫冰棍。
 —彼はアイスクャンディーを食べさせてくれる/あげ

る / やる。

(159) a ⑦他買給我冰棍喫。

⑧他買冰棍給我喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b 他給買冰棍喫。

—彼はアイスクャンディーを買って食べさせてくれる / あげる / やる

(160) a ⑨他給我買冰棍喫。

—彼はわたしにアイスクャンディーを買って食べさせてくれる。

b 他給買冰棍喫。

—彼はアイスクャンディーを買って食べさせてくれる / あげる / やる

動作主（受け身）

(161) a ⑤我給他弄壞了收音機。

—わたしは彼にラジオを壊された。

b 我給弄壞了收音機。

—わたしはラジオを壊された。

(153) (154) の b ができないのは「給」が直接目的語の直前に来てしまっているからである。

3・6 ここでもう一回 (80) の図表を、以上の構造的な事実を入れてまとめておく。

(162)

役割①

統語構造②

③の形式ができるかどうか③

「爲」「替」に置き換えられるかどうか④

「叫」「讓」などに置き換えられるかどうか⑤

「被」「叫」「讓」などに置き換えられるかどうか⑥

直接目的語が主題になれるかどうか⑦

間接目的語が主題になれるかどうか

「給」を文中に残して後の部分だけ文頭に行けるかどうか⑧

「給」を消して他の部分だけ文頭に行けるかどうか⑨

「給+名詞」が文頭に行けるかどうか⑩

直接目的語が省略され得るかどうか⑪

間接目的語が省略され得るかどうか⑫

間接目的語が省略される場合、「給」が残れるかどうか⑬

①	②	③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬
目 標	補語的目標動詞	
	① S + 給 + IO + DO	××××○? **○○○
	② S + V + 給 + IO + DO	○×××○*??○○×
	③ S + V + DO + 給 + IO	○×××○*??○○×
	補語形式自由な動詞	
	② S + V + 給 + IO + DO	○×××○*??○○×
	③ S + V + DO + 給 + IO	○×××○*??○○×
④ S + 給 + IO + V + DO	○×××○○??○○○	
目 的 者	⑤ S + 給 + IO + VP	×○××○○??○○○
動 作 者	使役	
	⑤ S + 給 + IO + CVP	××○×○○??○○○
	⑥ S + 給 + IO + DO + CV	××○×○○**○○○
	⑦ S + V + 給 + IO + DO + CV	××○×○***○○○
	⑧ S + V + DO + 給 + IO + CV	××○×○***○○○
	⑨ S + 給 + IO + V + DO + CV	××○×○○**×○○
	受け身	
⑤ S + 給 + IO + VP	×××○○***?○○	

4 「給」の品詞

ここでは「給」の性質を歴史的に振り返ってみて、現代語の「給」の立ち現れ方をもういちど考えてみることにする。

4・1 「給」はそんなに古いものではなく、太田 58 によれば、清代の北京語に初めて見えるのである。それまで、唐宋元明を通じて、「與」という言葉が用いられていた。

(163) 我有禁方，年老欲傳與公。(史記)⁶⁾

—わたしに秘伝の処方があるが、年老いたのであなたに伝えたいと思う。

(164) 將一大牛，肥盛有力，賣與此城中人。(生経)

—一匹の肥盛にして力ある大牛をこの城の中の人に売った。

(165) 脱身衣服，送與其夫。(賢愚経)

—自分がきている着物を脱いでその夫におくった。

以上のような「目標」の意味の他に、「受動者」などの用法もあった。

(166) 所欲，與之聚之；所惡，勿施爾也。(孟子)

—民の欲するところはこれがためこれをあつめ、にくむところはこれを施さないだけである。

(167) 或與中期説秦王。(戦国策)

—ある人が中期のために秦王を説いた。

この「與」はもちろんまず動詞として使われていた。現代中国語では「與」は少数の限られた動詞の後について、「目標」の意味に使われることがあるが、すでにその地位を完全に「給」などに譲った。

「給」は初期に「歸」「己」「饋」などにも書かれるが、それらはいずれも

「給」と同系列のもののである。「給」「歸」「己」「饋」などの語源は明らかではないが、太田58は、おそらく「與える」という意味の動詞から出たものと推測している。

4・2 「給」について、よくそれが動詞か前置詞かそれとも何かかといった議論が交わされるが、これまでの分析を通して、「給」は現時点でまだ動詞と前置詞の間を揺れているので、どちらかであるとも言えないし、またどちらの性質をももっているものであるということが言えよう。

「與」という動詞が先にあると、そこから「目標」「目的者」「動作主」などの意味役割を持つ前置詞的な用法が生まれてくる。そして「與」かまたはそれに近い意味の動詞から「給」「歸」「己」「饋」などの動詞が発生してきた。それがまた「與」のように前置詞的な意味を持つようになって、「與」を取って変えた、というのが「給」の生い立ちであると考えられよう。

現代中国語において「給」はまだ前置詞と動詞の両方の性質をもっている。まず次の例を見よう。

(168) 你給不給她寫信？

—君は彼女に手紙を書くか。

(169) 昨天我寄給了她一封信。

—昨日わたしは彼女に手紙を一通出した。

(168) (169) の両例が示しているように、「給」は普通の動詞のように「不」「了」の修飾を受けることができ、動詞の色が強く残っている。しかし一方では(170)のように過去を表す「過」をつけては言えない。

(170) a *以前我寄給過她一封信。

b 以前我寄過一封信給她。

—以前私は彼女に一通の手紙を出したことがある。

また、「目的者」の場合は「了」もつけられない。これらはみな前置詞的な性質のあらわれである。

このように「給」は動詞と前置詞の両方の性質を帯びていると言える。そして、どちらかという「目的者」のほうがより前置詞の性質をもっている。

5 「給」の語用論的な意味

5・1 「給」の「目的者」の意味役割についてよく「受益者」を表すものだと思われるのであるが、しかし次の用例から分かるように、「目的者」の場合（171）だけが、「受益」の意味をもっているばかりでなく、「目標」（172）、「動作主（使役、受け身）」（173）（174）も皆「受益」の意味を持つことがある。そして「給」は「目的者」の場合も含めて、単なる意味役割を表し、まったく「受益」の意味がない場合もあることはこれまでの例で分かるし、また逆に損失を受ける「受損」（175）（176）（177）（178）（179）の意味さえ帯びることがある。

(171) 我給你去買藥吧。

—ぼくは君に薬を買ってきてあげよう。

(172) 我送給她一顆心。

—わたしは彼女に心をささげた。

(173) 唱支山歌給黨聽。

—民謡を歌って、共産党に聞かせる。

(174) 我的病給他治好了。

—私の病気は彼に治された。

=彼は私の病気を治してくれた。

(175) 老師給我打了一個零分。

—先生はぼくに零点をつけてくれた。

(176) 她把我的事都給我說出去了。

—彼女は私のことを全部わたしのためにしゃべってしまった。

=私のことは全部彼女にしゃべられてしまった。

(177) 他總給我鬧。

—かれはいつも私のために騒ぐ。

=かれはいつも騒いでくれる。

(178) 他給我小鞋穿。

—かれはわたしに小さい靴を履かせる。

=かれはわたしの悪口などを言ってわたしを困らせる。

(179) 我給他騙了。

—わたしは彼に騙された。

このように、「給」構造に現われる「受益」「受損」はその構造と対応しているとは言いがたく、語用論的な含意として持つものと言わなければならない。

一般的に言うとき、間接目的語に来る人物にとって都合のいいことなら、「受益」になりやすく、都合が悪ければ「受損」になりやすい、ということが出来る。そして、主語に立つ人物が間接目的語に立つ人物より目上の人なら、「受益」になりやすく、反対なら「受損」になりやすい、ということが言える。

5・2 「動作主」においては使役と受け身の両方の意味をもっているわけであるが、その区別は、文脈の流れによって判断することができるが、動詞の構造にもよる。受け身の場合は動詞が往々にして「動詞+結果補語」の形式を取るのである。

(180) 我給他看了

—私は彼に見せた。

私は彼に見られた。

(181) 我給他看見了

—私は彼に見られた。

「看+見」は「動詞+結果補語」の構造であり、この場合は相対的に受け身として解釈することが多い。次の(183)も同じである。

飯給她喫了。

- (182) 一ご飯は彼女に食べさせた。
ご飯は彼女に食べられた。

- (183) 飯給她喫完了
一ご飯は彼女に食べられてしまった。

6 終わりに

以上は「給」を、意味役割を切り口として、「目標」「目的者」「動作主」の三つに分けて、分析してみた。そして統語構造を見ることによって、我々の分類が基本的に正しいことも裏付けられた。更に、「給」の「受益」「受損」は構造によるものではなく、語用論的な意味によるものであるということも見る事ができた。

しかし「給」についてはなお数多くの問題が残っている。たとえばいわゆる「間接目的語」と「直接目的語」の全貌を見渡して、その中で「給」を見ること、そして、どういう動詞が「給」を取ることができ、どういう動詞が取れない、そこにはどういう基準が存在しているのか、更に前置詞（介詞）と文の構造との関係は如何なるものか、といった、考えなければならぬことがたくさんあるが、これらは次の機会にゆずりたい次第である。

参考文献

- 太田辰夫 1958 『中国語歴史文法』 江南書院
 柴谷方良 1978 『日本語の分析』 大修館書店
 湯廷池 1978 『国語語法研究論集』 台湾学生書局
 唐啓運 1980 『句子成分論析』 上海教育出版社
 朱徳熙 1982 『語法講義』 商務印書館
 呉啓主・李裕徳 1986 『現代漢語「構件」文法』 湖北教育出版社
 李臨定 1990 『現代漢語動詞』 中国社会科学出版社

注

- (1) 前置詞的な「給」の発音について、[ji]であるという説がある。そうすると、

「給+給 (gěi + jǐ)」となり、別に抵抗感がなくなりそうである。現に「供給」は [gōng jǐ] と発音される。

- (2) 厳密に言えば、これは間接目的語とは言えないかもしれない。
- (3) しかし、「V+給」の「給」の省略については、年令差、個人差、地域差、文体差がある。大概、年配者、北方方言地域の人、文語体の場合は省略についてもっと緩いようである。
- (4) 「動作主」の使役としているものにはもっと雑多な意味、つまり使役のほかにも、「人間的終点目標」、「目的者」も入っている可能性が大いにある。即ちここでは意味よりも形式にとらわれるきらいがある。もう一度考え直すべきである。
- (5) ただし、方言と個人差がある。
- (6) (163)～(167)の用例は太田58を援用するものである。